

論 説



品質工学における技術の在り方 (8)

State of Technology on Robust Quality Engineering (8)

矢野 宏*

Hiroshi Yano

第6回の連載で、2013年第21回研究発表大会で著者が関わった研究のつながりから始めて、関係者に論文を送付して意見を求めた結果を紹介したが¹⁾、今回はこれに対する回答を含め、直接関係のない人にまで範囲を広げて集めた意見を紹介します。

8. エコシステムの広がり

8.1 多数意見を構成する意味

かつて東京電機大学理工学部知能機械工学科の3学年の統計工学の講義で、あえて品質工学の講義を行う過程で、日刊工業新聞の記者田井茂が広島地区の品質工学の活動、特にマツダの復活を紹介した記事「救えるか日本のモノづくり」²⁾へのレポートを学生に書いてもらった。このレポートを広島のマツダの安達範久、井田吉人、あじかんの金築利旺、さらに田井茂に送り感想を求めた。極めて興味ある返事が来て、特に安達は個々の学生のレポートに対する感想を記した。これに対してさらに学生のレポートを作り、こうした往復を「広島の品質工学の活動についての学校・企業・新聞のトライデント」として論文化した³⁾。この論文を吉澤正孝が改めて自らの研究論文としてくれた⁴⁾。それが吉澤の現在の技展のもとになった。

このような一連の活動から新しいつながりを作ることの重要性を感じていたことが、今回の研究へとなったと思う。前回、関係者の意見を集めて見て、自分の意見を言う以上に、人の意見を集めることの重要性が明らかになったような気がしている。それが今回の試みとなったが、果たしていかなる結果になるかは予想がつかない。ただ明らかだと思ふこと

は、個々の意見への自分の感想を安易に述べないで、多くの人の意見を集めることである。ただし、前回は多くの意見を並列的に紹介したが、今回は工夫が必要となるであろう。3通りに分類した。

8.2 エコシステムで関わった場合の意見

(1) エスケー石嶽秋元美由紀 (2013.10.2)

「品質工学における技術の在り方(6)」の感想を述べた私の意見に近いと感じたのは、広島県立総合技術研究所の高辻の感想である。本当に困った状況であれば品質工学の勉強はできるだろうという点と、新しい考え方に対する感受性と捉えた点である。本当に困った状況なのだと気づくことがなければ、新しい考え方を試してみるというスタートさえ切れないのではないのか。目前の課題を力業で乗り切ればいいという程度では、きっと本当に困ってはいない。本当に困っていなければ従来の方法で当面乗り切れるからである。もちろん、当面乗り切るという手法は根本的な解決ではないため、その後「本当に困った」と感じる人もあるだろうし、困ったままで従来手法を繰り返す人もあるのだと思う。人や研究のつながりといった、せつかく「差し伸べられている手」の存在は、本当に困っていない時には見えないのではないのか。

また、富山高専水谷淳之介の感想にある「著者(矢野)が関わらなければこれらの研究発表はなかったと言っても過言ではない」という指摘は、大会発表における私の発表そのものである。特に2013年第21回研究発表大会の事例は、当初は論文集に記載した程度までを発表して終わろうというつもりだった⁵⁾。水谷の言うところのマジックにより、論文集の段階とは比較にならないほどの研究ができた。

* 応用計測研究所(株)